

シンポジウム・宗教をどう捉えるか

ドグマとカオスの間で

——シンポジウム「宗教をどう捉えるか」まとめ——

橋本 直人

はじめに

全国若手哲学研究者ゼミナール（以下「若手ゼミ」と略）では毎年、全体企画としてシンポジウムを開催する。そしてシンポジウムの際に司会をつとめた者が、若手ゼミの機関誌である本誌『哲学の探求』にシンポジウムのまとめを執筆するのが通例となっている。そこで今回も、宗教を専門的研究テーマとしていないにもかかわらずシンポジウムの司会を引き受けた私に本稿執筆の命が下された次第である（ちなみに私の専門はドイツの社会学者M・ウェーバーに関する研究である）。

そこで以下シンポジウムについて私なりの観点からのまとめを試みることにしたい。ここで「私

なりの観点から」とあえて述べたのは、司会役を仰せつかったために実際のシンポジウムで好き勝手に発言できなかったための欲求不満の反映でもあるが、また、以下の叙述から明らかにするであろうように、「宗教をどう捉えるか」という問題に関わるということが、各人の価値関心や日々の営為を否応なく対象化することを迫るものだからでもある。

なお、以下で千葉・森・三浦の三氏の名を付して引用する場合には、シンポジストをつとめられた三氏が当日配布された報告原稿、及び森氏については本誌に掲載される予定原稿も合わせての引用である（したがって出典や頁数等は記載されな

い」という点をご了承されたい。また、以下で要約する三氏の論考について、詳しくは三氏自身による論文が熟読されるべきであるのは言うまでもない。

一 問題提起の背景

さて、読者諸賢が本稿を読まれる頃にはだいぶほとぼりもさめていであろうと想像されるが、一九九六年七月に「宗教」絡みのタイトルとなれば、当然オウム真理教をめぐる一連の事件や騒動が連想されるところであった。「宗教をどう捉えるか」というシンポジウムのテーマが決定される際にも、おそらくこの事件が影を落としていたはずである。

とはいえ、こうした事件がいわば「時事ネタ」的にシンポジウムで議論されたわけではもちろんない（そうした作業も別の局面では必要なことであるが）。本シンポジウムで目指されるべきはむしろ、そうした事件や特異な事柄を「契機」としつつ、それをより一般的な問題へと変換し、翻って我々自身の状況に対する反省への一助とすることであつただろう。それに、私見ではあるが、オウ

ム事件を他の様々な現象、例えばオカルト志向の根強さ、『ソフィーの世界』、また『脳内革命』ブームなどと連ねて考えれば、そこに何か一脈通じるものを——私から見れば、「価値の多神教」や「意味喪失」と呼ばれる状況^①への反応、という共通の性質を——感じることは不可能ではない。そしてシンポジスト三氏が検討を重ね、周到に準備を進めていった上で共通に設定された問題意識も、「絶対的な価値の拠り所としての宗教が崩壊した状況の中で宗教という価値体系をどう捉え得るか」というものであつたと思われる。つまり、価値の絶対性・普遍性／多元性・相対性、という問題において宗教を捉えよう、というのがこのシンポジウムでシンポジスト三氏が提起した問題の意味だったのである。

二 価値のカオス——千葉氏の問題提起

こうした問題関心からするならば、千葉氏の報告「ニーチェのニヒリズム批判」はまさに最初の報告に相応しいものであつたと言えよう。氏の報告は、ニーチェが「神の死」^②ニヒリズムの状況として提起した、「カオス的価値観における相互闘

争という多元的世界像」(千葉氏)とその克服、という問題を鮮明に提起するものだったからである。氏は、諸価値の根拠にして道德の根拠であったキリスト教が、「現実はそうではない」という懷疑や絶望から「神の死」ニヒリズム状況に至る、というニーチェの論理をたどつてゆく。その帰結は「世界は諸々の解釈相互の闘争によつて成り立つ」という「相対主義的な価値多元論」(千葉氏)であつた。だが、氏によれば、「全く無秩序な価値の構造は、人間を不安な状況へ、……絶望的な状況へと追い込む」というニーチェの認識は、カオスにとどまることを許さず、「強さ」を軸とする「人間の自己目的」としての「超人」を要請する。それは、キリスト教道德とは反対に「主體的で自由な人間を頂点とする新しいピラミッド」(千葉氏)の最高点に位置する像である。しかし、氏はニーチェが「ピラミッド」という構造そのものを変えることはできなかった」という批判の可能性を指摘し、またニーチェにおける他者論の欠如という従来の指摘を踏まえ、「彼の哲学自体が極めてニヒリスティック(虚無主義的)な論のように見えてしまう」という。こうして、我々はニーチェの提起

したニヒリズム的状况という問題に立ち返ることになる。「我々は諸々の価値を相対化する立場と、或る程度まで絶対化する立場との間を彷徨しつつ、あるべき価値体系の可能性を今後も模索せざるを得ないのではないかと思われる」と氏は報告を結んでいる。

以上の氏の報告をめぐっては、実はシンポジウム当日にあまり質疑が交わされず、これを惜しむ声が後に参加者から聞かれた。だが、そのことは私にはむしろ、すでに我々が氏の提起したニーチェの問題圏の中にいることの裏返しであるように思われる。つまり、氏の提起した問題はまさに我々が共有する問題であり、だからこそ問題の意味を理解するための質問というものがなかった、と言えるのではないだろうか。我々が価値のカオスを越えて新たな価値の創造を試みよう、また逆に価値のカオスを肯定しようと、氏がニーチェに即して提起した問題は我々の前に立ち続けると考えるべきであろう。その意味で、氏の報告は我々の置かれている状況を確定する重要なものであつた。

三 特権的真理から価値の相互批判へ―森氏の展望

だが、我々がこうした価値の力オスという状況認識を共有していたとしても、宗教はこの認識に抗して「不動の事実、真理そのもの」(森氏)を語ろうとし、その結果しばしば排他性に陥る。オウムもまたそうした排他性の一例であろう。そこで、宗教を「真理体系としてではなく価値体系として捉え」ることで「宗教的な信条と関わりのない者にも理解可能なポジティブな宗教観を提示」(森氏)しようとしたのが森氏の報告「多元的宗教理解への視座」である。

氏はまず、オースティンの言語行為論やウィトゲンシュタインの「意味の使用原理」を用いて、価値を客観的概念と見る十九世紀的な価値哲学とは異なる価値概念を提示する。すなわち、価値とは真／偽という認知的基準を適用し得ないものであり、それゆえ客観的真理ではなく行為主体の欲求や関心といった主観的なものに関わる。だがそれは価値に関するものが無意味だということではなく、むしろ行為遂行的なレベルで有意義なのである。その意味では、宗教もそれ以外のものと同

じ価値体系である。だが、宗教的価値体系の特性は、それが価値に関わるものでありながら「言明の真理すなわち事実的性格に固執する」(森氏)という点にある。その結果、宗教的世界解釈は単なる解釈という地位を捨て、「無条件にそれを真理と見なす硬直したドグマとな」り、「行為主体を離れていわばアプリオリな妥当性を僭称する」ことになる(森氏)。この点では、排他的・独善的神学を克服して諸宗教間の相互理解を目指したジョン・ヒックの宗教多元主義も例外ではない、と氏は見る。氏によれば、宗教がこうした固執を捨てない限り、逆に非宗教者の側から宗教を荒唐無稽とする非難を招くし、閉鎖的な自己完結に至る他はない。これに対して氏が宗教的価値体系に向けて提起するのは、「世界観の相違は世界そのものの相違ではない、というきわめて平明な事実を容認すること」(森氏)である。この事実を認めることで、宗教は絶対的真理という地位を捨て、宗教以外の価値体系との共通基盤が開け、これらと競合しつつ相互に批判することで自己への省察と変革が可能となる。そうすれば、宗教は独善に陥ることなく、荒唐無稽という批判に屈することなく、他

者からも認められる独自性を獲得し得る、と述べ、氏は「開かれた宗教」への展望を語るのである。

以上の氏の報告の核心は、事実のレベルと評価的・行為遂行的レベルとを区別することで宗教と非宗教、あるいは対立しあう価値相互の間の共通基盤を開けないか、という提起にあった。そして、シンポジウムの際の質疑も多くはこの点に集中した。こうした議論については後で詳しく見ることにするが、この問題は、おそらく我々の置かれている状況の根深さに関係するだろう。我々は、事実さえ相対的ではないのか、という懐疑にさらされているからである。

四 さらなる対自化の視点—三浦氏の相対化

「多元的宗教理解」という森氏の視点を承けつつ、三浦氏の報告「社会学的『宗教研究』批判の一つの試み」はこうした懐疑にまで踏み込もうと試みるものであった。というのも、特に宗教を対象として研究を行なう場合、「価値を離れた事実」を確定する作業にも、否応なく研究者の価値態度が関わってしまうからである。

宗教研究は独特の困難をはらむ。例えば、森氏

も触れたような荒唐無稽という非難¹¹無理解や、逆に研究者自身によるドグマ的支持、ということもある（オウム事件に対する宗教学者の態度が連想される）。こうした困難が生ずる理由は「研究者が依拠する無自覚的な『信仰』が介在してしまうこと」にある、と三浦氏は言う。例えば「どの宗教にも組まないという不信仰の立場も、……不信仰という一種の『信仰』の立場」（三浦氏）、科学的・日常的価値体系を擁護する立場に他ならないからである。こうした困難に対して氏が要請するのが「参加的客観化」である。それは、研究者自身が宗教をめぐる利害関心の闘争の圏内にいるということを踏まえ、自身の立場やそこから生ずる様々な利害関心を客観化する、という姿勢である。こうした姿勢からは、宗教研究も、例えば教義内容の——是非論に陥りがちな——研究に特化せず、むしろ「社会的『場』」に宗教を位置づける視点」（三浦氏）に向かうことになる。事実、氏の報告で行なわれた現代日本の新興宗教の検討は、家族の変容という問題との関連に置かれたものであった。

氏は社会学や人類学の知見を踏まえつつ、伝統

る。

五 ドグマとカオスの間―質疑応答の主題

こうして、氏の報告とともに我々は再び最初の問題へ、我々自身が置かれている価値のカオスという状況へと再び立ち返ってきた。シンボジスト三氏が自分たちの報告をあくまで「問題提起」である、と強調し続けた理由もここにあるだろう。三氏が提起したのは価値のカオスという状況Ⅱ問題であってそれへの「解答」ではなかった。むしろ単純明快な「解答」などあり得ないということこそ、三氏の提起したことだったと言えるだろう。それゆえ、シンボジウムの質疑応答の大部分も、価値の絶対性と相対性との間を彷徨しつつ可能性をどこに求めるか、という問いをめぐる行なわれることとなった。以下ではそうした質疑応答を私なりの観点から、また私見を交えつつ再構成したい。

社会において宗教はカオスと社会秩序とを媒介する解釈図式、価値と意味の体系であった、という点から出発する。日本の場合、それは「家制度と先祖崇拜」（三浦氏）であった。日本では社会編成が「家」を中心としており、「家」が宗教団体でもあったわけである。だが、家族観も現実の家族とともに変容してゆくにつれ、「家」は社会編成の中心でなくなり、宗教から切り離されてゆく。氏は、この過程が同時に「家」に基づく伝統的解釈図式の喪失と新たな解釈図式の探求の過程であった、と捉える。そしてこの過程で、はじめは伝統的家族観をベースとした宗教（旧・新宗教）が発展したが、やがてアトム化した現実の家族からアプローチする宗教（オウムを含む「新・新宗教」）が登場する。この宗教は「空しさ」を起点として現世離脱や終末論に向かうが、それは宗教に限られたことではなく、我々自身を含めた社会的な文脈において把握されるべき現象である、と氏は明快に図示する。実際、これらの宗教の基盤は、氏が『オウム真理教の軌跡』から引用したように、「自由の重荷の帰結であるニヒリズム」、我々が千葉氏の報告に即して確定した事態に他ならないのであ

ろう。実際、シンポジウムでも、「異なる価値の間での相互理解がそもそも可能なのか、原理的対立は存在しないのか」という疑問が提起された。これに対して森氏は、「原理的対立と見えるものの背後には真／偽の二値論理があるのではないか」と指摘する。真の価値／偽の価値という二値論理を取らなければ、異なる価値相互の歩み寄りが可能だ、というのが氏の主張であった。

だが、真／偽という二値論理的基準を離れたにせよ、なお価値相互の対立は残る。「この対立をどうするのか、価値が相互に『歩み寄り』ことがどのように可能なのか」という疑問は、このことゆえに提起されたと思われる。この疑問はまた、異なる価値の間で何らかの共通の規範は可能か、という問いにもつながってゆく⁽²⁾。とはいえ、絶対的価値体系を失った状況にある我々には、もはや何か実的に確立された規範は求めるべくもない。あり得るのは「異なる価値が相互に差異を認める」(シンポジストからの応答)という「規範」であろう。だが、この根底にある「世界観の相違は世界そのものの相違ではない、というきわめて平明な事実」(森氏)は同時に、自分の世界観≡世界と信

じたものが現実の世界とは異なる、という可能性を含意する。そして人が何らかの価値体系に、世界観に服するものであるならば、この「平明な事実」を人がどこまで容認し得るか、という問いはそう簡単な問いではあるまい。

これを裏返せば、やはりシンポジウムの際に提起された「森氏が主張するように、真／偽という事実のレベルと評価に関わる価値のレベルとを明確に区別し得るのか」という疑問になろう⁽³⁾。例えば科学ないし学問もまた一つの価値体系である、というところまで相対化すれば、事実／事実の評価、という区分は困難となろう。そこまでは相対化しないのならば、それもまた価値的態度ではないのか、という嫌疑を招くだろう。この問題は、事実と評価との区別により価値相互の共通基盤を開く、という森氏の展望そのものに関わる問題である。同時に、三浦氏の報告で論じられた研究者の対自化の問題、事実の認識に介在する価値的要素をどこまで客観化できるか、という問題に直結するものでもある。しかし、こうした価値的要素の客観化と事実認識からの分離で話が終わるわけではない。千葉氏の報告で、諸価値の根拠としての

キリスト教に対する「深い懷疑」を生み出したのが「知的良心（『誠実さ』）」とされていたことを思い起こそう。対自化Ⅱ相対化を進めることが、ニヒリズム的状况につながる深い懷疑をもたずとするならば、千葉氏と三浦氏の報告で示唆された、価値の力オスから来る不安、自由の帰結としてのニヒリズムという問題は残されたままではなからうか。

ここまで来て、シンポジウムの質疑の際には時間の関係で十分に触れられなかった論点がぼんやりと姿を現してきたように思われる。それは、そもそも宗教とは何か、学問と宗教との間にどのような差異がありどのような共通性があるのか、という問いである。「宗教とは何か、という問いに対して明確な答えが与えられていない」（森氏）のと同様に、実は我々は、学問とは何か、我々が携わる学問という営みの帰結がどのようなものなのか、ということもまた十分に分かってはいないのではないだろうか。我々自身の携わる学問という営みそのものが懷疑とニヒリズムに帰着するのだとしたら、我々は自らの思考を犠牲とすべきなのであるか。だが、思考と反省が失われれば、森氏や

三浦氏の報告のように、カオスをなしている価値がそれぞれドグマと化して調停不可能な対立に陥りはしないだろうか。

我々の直面する状況Ⅱ問題の根は深いと言わねばなるまい。

おわりに

以上、私見を交えつつ私なりの観点から、シンポジウムでの三氏の報告と質疑応答を概観してきた。今回のシンポジウムに際しては、一節でも触れたようにシンポジスト三氏が何ヶ月も検討会を重ねるなど周到な準備をされ、またフロアの参加者も活発な討議を繰り広げられた（本来シンポジウムはかくあるべし！）。おかげで、「バラバラな報告から何とかして論点を捻り出す」「低調な議論を何とかして煽る」、というシンポジウム司会者の二大義務を私はまったく負わずに済んだわけである。ここで改めてお礼を申し上げたい。これだけ恩恵を被ったあげく、以上のまとめが不適切・不行届きであるとしたら（その恐れは決して少なくないのだが）、ここで先んじてお詫びを申し上げます。冒頭に述べたように、分不相応な司会役を仰

せつかった人間のストレスと欲求不満との産物である、と寛恕いただければ幸いである。

註

- (1) ちなみに、(周知のこととは思われるが)「価値の多神教」はM・ウェーバーの現代認識について語られる比喩であり、「意味喪失」はJ・ハーバマスによるその言い換えである。Vgl. M. Weber, *Wissenschaft als Beruf*, in: *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre*, Tübingen, 1922. J. Habermas, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt a. M., 1981, Bd. 1.
- (2) この問いは、若手ゼミで一九九三年に行なわれたシンポジウム「道徳の根拠」で主題となった問題につながるものである。『哲学の探求 一九九三年度版』全国若手哲学研究者ゼミナール編、一九九三年、参照。
- (3) 事実、森氏の援用するオースティン自身、行為遂行的発言と事実確認的発言との区別を最初に立てながら、その区別が実は確保し切れ

ない、という問題を指摘することで論を進めている(J・L・オースティン、坂本百大訳『言語と行為』、大修館書店、一九七八年、一五九〜一六〇頁)。とはいえ、この区別が本当に確保し得ないかどうかについてはなお議論があらう。

(はしもと なおと 一橋大学)